



# 日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



## 31歳 がぶり魂

大相撲初場所千秋楽で優勝を決めた大関・琴奨菊。日本出身力士として10年ぶりの快挙=1月24日 撮影：越川 亘（報知新聞社写真部）

### 3・11 現地取材団 次々派遣へ 福島原発、岩手・宮城・福島 被災地を歩く

東日本大震災と福島原発事故から5年がたつ。企画委員会は1月から被災地の首長や専門家を招く新企画「3・11から5年」を始め、現場を歩く現地取材団を3回、立案した。

まず、1月25日から27日にかけて東電福島第一原発構内に計39人が2班に分かれて入り、廃炉に取り組む現場取材した。1号機から4号機の建屋周辺や遮水壁工事現場では、防護服に半面マスクを着用し、バスから降りて近くを歩いた。汚染水タンク周辺など多くのエリアでは、通常の作業服姿で動けた。防護服の準備などの理由で取材人数を限定。申し込みは定員の2倍近くに達し、やむを得ず抽選となった。クラブの福島原発取材団は14年1月に続き2回目。（2ページに写真、10～11ページに特集）

2月は被災地取材団を2度派遣する。2月17日から19日まで2泊3日で岩手・宮城県の大船渡、陸前高田、気仙沼、南三陸の4市町を取材する。さらに2月24、25日は1泊2日で福島県飯館村、南相馬市、相馬市、宮城県山元町を回る。それぞれ首長や被災者の方々に会い、復興の取り組みを取材する。

「3・11から5年」の連続会見でも当事者から復興の現状と課題を語ってもらう。

また、G7サミットが開かれる伊勢志摩にも取材団を派遣する。3月8、9日の日程で、三重県知事の会見、サミット会場のホテル取材などを予定している。

（中井良則）

|                                                                                                     |       |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| クラブゲスト                                                                                              | 3・4   |
| 早川英男／渡辺博史／武者陵司／藻谷浩介／山口義行／越野修三、秋富慎司／野田武則／菅原茂／御手洗瑞子／梶田隆章／野田章子／田中浩一郎、保坂修司／ジャリル・スルタノフ／アトウール・カレ／小林恭子／室井尚 |       |
| 会見リポート                                                                                              |       |
| 2016年経済見通し                                                                                          | 5     |
| 越野修三・岩手大地域防災研究センター教授、秋富慎司・防衛医科大学校講師／野田武則・岩手県釜石市長                                                    | 6     |
| 菅原茂・宮城県気仙沼市長／御手洗瑞子・気仙沼ニッティング社長                                                                      | 7     |
| 梶田隆章・ノーベル賞受賞者／小林恭子・在英ジャーナリスト                                                                        | 8     |
| 記者ゼミ 次世代ジャーナリズムの現場                                                                                  | 9     |
| 福島第一原発取材団報告                                                                                         | 10・11 |
| ワーキングプレス                                                                                            |       |
| 慰安婦問題 日韓合意                                                                                          | 12    |
| 毎日新聞社 大貫智子                                                                                          |       |
| 宜野湾市長選                                                                                              | 13    |
| 琉球新報社 斎藤 学                                                                                          |       |
| SMAP解散騒動                                                                                            | 14    |
| スポーツニッポン新聞社 阿部公輔                                                                                    |       |
| リレーエッセー                                                                                             | 15    |
| 反原発の弁護士 藤田一良さん                                                                                      |       |
| 山崎一夫                                                                                                |       |
| 書いた話書かなかった話                                                                                         | 16・17 |
| 9.11から15年 今思うこと 谷村 啓                                                                                |       |
| 大阪文楽ツアー                                                                                             | 18    |
| マイBOOKマイPR                                                                                          | 19    |
| 試写会                                                                                                 | 20    |
| 新年互礼会員懇親会                                                                                           | 21    |

## 新会見企画 めじろ押し

### 3・11 国連 米大統領選 企業トップ

このところ、トップニュースがまぐるしく入れ替わる。1週間前、あれほど騒いだ大ニュースが何だったのか忘れてしまうほど、目の前の事件を追うのに忙しい。それがジャーナリズムの常かもしれない。とはいえ、日々のニュースを歴史の中に位置づけ、背景を知り、時代を読むのもジャーナリストの仕事だろう。その手助けになるかもしれない。2016年の新しい会見企画が始動している。

1面で紹介した「3・11から5年」シリーズは1月、御手洗瑞子・気仙沼ニッティング社長ら4人を招いた。(6・7ページに会見リポート)

#### 日本人職員が語る国連

「国連と日本人」シリーズは、今年12月の日本の国連加盟60年にあわせて企画した。昨年は国連創設70年だったし、日本は1月から安保理非常任理事国だ。国連本部・各機関の職員4万4000人のうち日本人は約800人。世界で活躍する職員や関係者に国連の実像と今後を語ってもらおう。モルディブで国連諸機関をまとめる国連開発計画(UNDP)の野田章子さん(1月8日)からスタートした。国連広報センターと協力し、地球狭しと現場を走り回る日本人を招いていきたい。

#### アメリカ 変わる・変わらない

4年に一度の米大統領選にも関心が集まる。8年前は初の黒人大統領当選に世界がアメリカの変化を感じた。今年もトランプ現象や、初の女性大統領誕生か、など話題は多い。ただ、シリーズ会見として取り上げたいのは、勝敗の予想や選挙戦の行方だけではない。政治、外交、経済、社会とあらゆる面で曲がり角に見えるこの大国がどこへ向かうのか。どこが変わり、何が変わっていないのかを探りたい。「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」と名付け、ゲストに深く切り取ってもらおう。1回目は日本の代表的なアメリカ研究者、古矢旬さんのポピュリズム論(2月5日)。

#### チェンジ・メーカーズに聞く

経済では、企業トップを招く新企画「チェンジ・メーカーズに聞く」を2月から始める。IT、ロボット、イノベーション、新規事業、生まれ変わる老舗。変化に対応し、変化を作り出し、変化で飛躍する。成功の鍵となる条件と経営者の先見性を聞き出したい。2013・14年度に行った企画「成長戦略には何が必要か 現場からの視点」も注目企業の社長

を招き好評だった。行き詰まりばかり指摘される日本経済の中で「まだまだ元気」を描くシリーズになるだろう。2月は志賀俊之産業革新機構会長兼CEO、山海嘉之サイバーダイナミクス社長が登場する予定だ。(18ページに関連記事)

すでに取り組んでいる会見企画「沖縄から考える」「TPP」「現代日本の貧困」「中国とどうつきあうか」「イスラムの視点」なども引き続き進めていく。

なお、昨年末で終わった「戦後70年 語る・問う」は14年9月から1年4カ月間、計42回延べ46人を招いた大河企画となった。

(専務理事 中井良則)



福島第一原発取材団 防護服を着用して建屋周辺を歩く  
(10～11ページに特集)

**越野 修三** 岩手大学地域防災研究センター教授(右)  
**秋富 慎司** 防衛医科大学校講師(左)



震災の経験を教訓にするには、「縦割り行政の改革が必要。まず国レベルで改革しないと自治体だけでは難しい」(越野)、「災害支援は競争ではなく協力。現場をつなぐシステムが重要」(秋富)。

■ 1・13(水) シリーズ企画「3.11から5年」①/司会：山崎登委員/出席：43人

**野田 武則** 岩手県釜石市長



震災後、人口減少に悩むが、「子育て環境整備などを地道にやる。復興事業関係者など住民台帳に載っていない『つながり人口』の人たちも大切にしたい」。「日本で艦砲射撃を2度受けたのは釜石だけ。それでも復興した」と「鉄のまち」の誇りがのぞいた。

■ 1・19(火) シリーズ企画「3.11から5年」②/司会：川上高志委員/出席：37人

**菅原 茂** 宮城県気仙沼市長



震災から5年。「あまり報道されないが、地盤沈下が復興を阻む最大の障害になっている」「復興事業は国の復興庁と直接やりとりすることが多く、市職員がずいぶん鍛えられた」。商社員として海外勤務の経験もあり、パワポを駆使して現状と課題を語った。

■ 1・28(木) シリーズ企画「3.11から5年」③/司会：山崎登委員/出席：47人

**御手洗 瑞子** 気仙沼ニッティング社長



マッキンゼー社勤務からブータン首相フェローを経て、被災地で編み物会社の経営者になった異色の経歴。黒字と拡大を可能にした経営感覚、人をまとめる組織力、未来への夢を語る発信力…とても30歳とは思えない。この人の今後に注目したい。会見動画は必見。

■ 1・29(金) シリーズ企画「3.11から5年」④/司会：小栗泉委員/出席：34人/会見詳録

**梶田 隆章** 東京大学宇宙線研究所長・ノーベル賞受賞者



「若者が長期的視野で研究できなくなっている」「優秀な人がクビの心配をせずに研究できる環境を」「このままでは基礎研究での日中逆転も」一柔和な語り口だが、日本の科学研究への危機感が言葉の端々に。中背と思っていたら180cm超える長身だった。

■ 1・7(木) 記者会見/司会：服部尚委員/出席：92人

**早川 英男** 富士通総研エグゼクティブ・フェロー  
元日銀調査統計局長



アベノミクスの評価は、「円安・株高〇、物価△、経済成長×」。「日本は70年代、平等と高収入を同時達成。いい時代を1回経験するとなかなか変わらないが、このままでは日本は『ゆでガエル』になる」と、元日銀理事は強く警告した。

■ 1・13(水) 経済見通し①/司会：実哲也委員/出席：130人/会見詳録

**渡辺 博史** 国際協力銀行(JBIC)総裁



財務官出身の国際経済の論客。「経済見通し」では3年連続の登場となった。英エコノミスト誌、NYタイムズ紙、FT紙など海外有力メディアに掲載された一コマ漫画を題材にしたおなじみの手法で、国際経済の現状を縦横無尽に語った。

■ 1・18(月) 経済見通し②/司会：水野裕司委員/出席：65人

**武者 陵司** 武者リサーチ代表



約100種類の統計・グラフを使い、米中日を見通した。「米国は盤石と言っている」「中国は深刻な停滞過程に」「日本企業はビジネスモデルを技術・品質による非価格競争に転換し、稼ぐ力が十分にある」。日米は明るく、暗いのは中国。消費力が鍵と言う。

■ 1・18(月) 経済見通し③/司会：福本容子委員/出席：68人

**藻谷 浩介** 日本総合研究所調査部主席研究員



中国人の爆買いから大量の空き家、株価まで気になる問題を次々に切り分けた。切り札は人口。「同じ温泉でも熱海の生産年齢人口は激減するが、別府はそれほど減らない」「島根県の出生率が1.63と高いのは若い女性が働くから」。常識がひっくり返る快感。

■ 1・20(水) 経済見通し④/司会：安井孝之委員/出席：115人

**山口 義行** 立教大学経済学部教授  
中小企業ネットワーク「スモールサン」主宰



中小企業経営者1600人のネットワークを率いる。「隣接異業種への挑戦がふつふつと起こっている」。左官、ガレージハウス、パチンコ台、洗車、線香…。壁に立ち向かった経営者の成功例を次々に紹介。官庁や大企業取材だけでは経済の最前線はわからない。

■ 1・22(金) 経済見通し⑤/司会：堀靖彦委員/出席：71人/会見詳録

**むろい 室井 尚** 横浜国立大学教授



文科省による文系学部の廃止・縮小路線を批判した『文系学部解体』(角川新書)を出版した。「大手コンビニの本社が文科省で大学は店舗、教員はバイト店員」「大学は無力な奴隷。私は辞めさせられる覚悟で声を上げた」。強い怒りが会見場を覆った。

■ 1・28(木) 研究会「文系学部はどうなる」/司会:倉重篤郎委員/出席:59人

**のだ しょうこ 野田 章子** モルディブ国連常駐調整官兼  
国連開発計画(UNDP)常駐代表



民間企業から国連職員に転身して19年。コンゴ、パキスタン、モンゴル、ネパールの勤務を経て、現在はモルディブで国連常駐調整官の仕事をする。異文化がせめぎ合う現場に身を置くが、はつらつとした明るさが印象的。「意志あるところに道あり」と揮毫した。

■ 1・8(金) シリーズ企画「国連と日本人」①/司会:小栗泉委員/出席:48人

**たなか こういちろう 田中 浩一郎** 日本エネルギー経済研究所常務理事  
中東研究センター長(右)  
**ほさか しゅうし 保坂 修司** 同研究所研究理事、同センター副センター長(左)



「サウジはサルマン国王の息子、ムハンマド・ビン・サルマン副皇太子の存在感が増している」(保坂)、「イランは、2月の専門家会議選挙やホメイニ師の孫であるハサン・ホメイニ師の動向に注目」(田中)

■ 1・15(金) 研究会「サウジ・イラン断交:地政学的影響を考える」/司会:脇祐三委員/出席:93人

**ジャリル・スルタノフ** ウズベキスタン  
日本人抑留者資料館館長



戦後、ウズベキスタンに強制連行された日本人抑留者の歴史を伝える資料館を私財で運営、その功績で日本政府に招聘された。「今後は資料館を拡張し、現代日本を知る研究センターも併設したい」と抱負を語った。「私たちは全員、一つの家族」と揮毫した。

■ 1・21(木) 記者会見/司会:川戸恵子委員/通訳:吉岡ゆき/出席:37人

**アトゥール・カレ** 国連フィールド支援担当事務次長  
(フィールド支援局長)



訪日中は官房長官、防衛相など政府要人と会談、自衛隊施設学校も視察した。「駆けつけ警護」など自衛隊の国連PKO任務拡大については「国連は国内立法にはコメントしない」としたうえで「PKO要員の安全向上、平和貢献につながれば歓迎する」と述べた。

■ 1・22(金) 記者会見/司会:土生修一事務局長/通訳:西村好美/出席:30人

**こばやし きんこ 小林 恭子** 在英ジャーナリスト



欧州メディア事情をロンドンから発信している。近著『フィナンシャル・タイムズの実力』(洋泉社)では、現地取材を基に日経が買収したFT紙の歴史や電子戦略について詳述した。「買収以降、FTに日本関連が目立つ。世界への日本情報発信に貢献大」

■ 1・27(水) 著者と語る『フィナンシャル・タイムズの実力』/司会:福本容子委員/出席:98人

## 会見余話

● 毒あり、味あり、藻谷節がさく裂

エコノミストといえばお堅いイメージがあるが、藻谷浩介さんは際どいジョーク入りの機関銃トークで有名だ。「今日は体調が悪い」と疲れた様子で控室に現れたが、会見が始まると、いつもの藻谷節がさく裂した。

パワポの図表を使って経済データを説明している最中に居眠りしている出席者を見つけると、「データの話をすると寝る人が増えますねえ」と甲高い大声でズバリと指摘。最後列にいた私からは、数人がピクツと反応して急に背筋を伸ばしたのが見えた。

人口減少への危機感を語る時には「年寄りのなり手もない秋田県」と刺激的な一句も披露。

ヒヤヒヤ、ニヤニヤして聞いていたが、「生イカは長もちしないし、スルメにすれば別物になる。生イカ(ナマの事実)を上手に一夜干しにするのが優秀なジャーナリスト」の一言には思わずうなずいた。

● 「関西弁の釜石市役所職員」の効用

「3・11から5年」シリーズで、被災地首長ゲストの第一号として、釜石市長の野田武則さんが登場した。他県からの出向職員の話が意外性があり新鮮だった。

「復興事業などで人手不足になり、全国

の自治体から職員を派遣してもらっています。関西弁の釜石市役所職員、これがいいですよ。隣近所には言えないことが外から来た人には気軽に言える。ヨソから来た人たちの交流が大事だと実感しました」後日、市役所に聞くと、現在、他都道府県から約40人が出向中で、「区画整理で地権者との交渉も出向職員は土地のしがらみもなく、そのうえ関西弁で交渉されると場もなごみ、助かっています」とのことだった。

「内部にある外部性の効用」。これは釜石市役所だけの話ではないのでは:示唆に富む指摘だった。

日本記者クラブ事務局長 土生 修一

2016年  
経済見通し

続く「ぬるま湯」状態 (早川)

中国は3、4年で底打ち (渡辺)

追加緩和で円安の定着を (武者)

女性、若者の所得増を (藻谷)

「隣接異業種」と連携へ (山口)

(写真上左から時計回りに早川、渡辺、武者、藻谷、山口の各氏)

2016年の日本経済、世界経済は株安と原油安という激しい市場の動きで始まった。国内経済は「緩やかな回復」と見る向きは多いが、「アベノミクスの息切れは明らかに」と大半の識者は一致する。一方、世界経済は21世紀に入ってから牽引役を担ってきた中国が減速に向かい、不透明感が増している。

日銀出身のエコノミスト・早川英男氏は、日銀の異次元緩和は「短期決戦の陣立てだったが、長期戦が必至」と、アベノミクスは転機を迎えたと主張。ただ企業収益は過去最高で、労働市場は完全雇用状態である。早川氏は「内需が自律的に悪化する理由はない」とみて、「16年度の成長率は1%台で、日本経済は『ぬるま湯』状態が続く」と言う。「ゆでガエル」になる前に日本企業は世界的なイノベーションの波に乗り遅れないようにしなければならないが、「日本企業の影は薄い」と心配顔だった。

海外メディアの風刺画を使って国際経済を解説する渡辺博史氏。今年を「統合、グローバルリズムが進み世界が一体化する流れが逆流する転換点」と位置づけた。難民問題で欧州には遠心力が働き、ドイツのメルケル首相のリーダーシップも低下気味。米、仏では排外的な主張をする政治家が台頭し、物事を決められない「決定の空白」が起きる可能性もある。渡辺氏は8年前の米大統領選の際にも「決定の空白」が起き、リーマンショックへの対応が遅れたと指摘、「今年はその再来か」と懸念を示した。懸念材料の中国は成長率が下がることを前提に「3、4年で底打ち。その後回復するのでは」と中期的に低迷の時代へ入ると見通した。

エコノミストの武者陵司氏は「米国は明るく、中国は暗いが、日本は飛躍期の入り口に」と楽観論を披露。

2016年の日本経済、世界経済は株安と原油安という激しい市場の動きで始まった。国内経済は「緩やかな回復」と見る向きは多いが、「アベノミクスの息切れは明らかに」と大半の識者は一致する。一方、世界経済は21世紀に入ってから牽引役を担ってきた中国が減速に向かい、不透明感が増している。

日銀出身のエコノミスト・早川英男氏は、日銀の異次元緩和は「短期決戦の陣立てだったが、長期戦が必至」と、アベノミクスは転機を迎えたと主張。ただ企業収益は過去最高で、労働市場は完全雇用状態である。早川氏は「内需が自律的に悪化する理由はない」とみて、「16年度の成長率は1%台で、日本経済は『ぬるま湯』状態が続く」と言う。「ゆでガエル」になる前に日本企業は世界的なイノベーションの波に乗り遅れないようにしなければならないが、「日本企業の影は薄い」と心配顔だった。

海外メディアの風刺画を使って国際経済を解説する渡辺博史氏。今年を「統合、グローバルリズムが進み世界が一体化する流れが逆流する転換点」と位置づけた。難民問題で欧州には遠心力が働き、ドイツのメルケル首相のリーダーシップも低下気味。米、仏では排外的な主張をする政治家が台頭し、物事を決められない「決定の空白」が起きる可能性もある。渡辺氏は8年前の米大統領選の際にも「決定の空白」が起き、リーマンショックへの対応が遅れたと指摘、「今年はその再来か」と懸念を示した。懸念材料の中国は成長率が下がることを前提に「3、4年で底打ち。その後回復するのでは」と中期的に低迷の時代へ入ると見通した。

エコノミストの武者陵司氏は「米国は明るく、中国は暗いが、日本は飛躍期の入り口に」と楽観論を披露。

## アベノミクスは息切れ 牽引役なしの世界経済

中国経済が落ち込んでも米国経済が堅調なら、日本経済も強いという主張だ。「アベノミクスの息切れは明らか」としながらも、さらなる緩和で円安期待を定着させることが必要と異次元緩和の継続を求めた。武者氏はアベノミクスが企業のアニマルスピリッツを刺激する効果はあったと評価。企業行動も変化し、「稼ぐ力」は十分にある」と話したが、やや強気で楽観的だったのが気になった。

地方をくまなく回る藻谷浩介氏と中小企業の現状を詳しく知る山口義行氏に共通するのは「現場に解はある」という現場主義。アベノミクスが円安、株高をもたらし、都市部では「資産効果」が生まれているという通説を統計数字で否定してみせた藻谷氏。「空き家が一番多いのはどこ？」と問いかけて、「実は東京」とニヤリ。「田舎では？」と思ひ込む「常識」が政策や報道をゆがめると説いた。アベノミクス批判派といわれる藻谷氏だが「安倍首相が女性活用や賃上げを求める点は全く正しい」と話し、若い女性が働き、出生率を高くし、若者の所得を増やすことが日本経済の成長につながる」と力説した。

山口氏は例年年初に常に高めに政府やエコノミストの経済見通しを「中小企業経営者は違和感と不信感で見ている」と述べ、中小企業の景況感は厳しいと言う。ただ厳しい状況下でも「市場の壁、地域の壁、人手(不足)の壁を越えていく経営者はいらる」と話し、「隣接異業種」との連携の重要性を指摘した。人手不足の左官業でイノベーションを起こした中小企業など具体的な事例を紹介した。日本の現場は捨てたものではない。「現場」をもっと伝えてほしい。山口氏の記者への注文だった。

企画委員 朝日新聞社編集委員 安井 孝之

## 3.11から5年

**越野 修三** しんの しゅうぞう  
岩手大学地域防災研究センター教授  
秋富 慎司 あきとみ しんじ  
防衛医科大学校講師



が、共に「危機管理はイメージ」と言い切った。過去に大規模災害の現場を踏んできた共通点がある。

### 危機管理はイメージから 日常から災害を考える文化づくりを

越野氏は1995年の阪神淡路大震災で、陸上自衛隊第13師団（広島）の作戦部長として神戸市に入り、救助活動の指揮を執った。行政が「神戸では地震が起きないという神話」を信じ、災害に向けた事前準備を十分にしていなかったことを痛感したが、その経験は岩手県防災危機管理監に転じて生かされたという。尽力したのは準備と訓練。3・11での県の対応は十分ではなかったが、「準備

備していなかったら、もつとひどいことになっていただ」と振り返る。

「備えあれば憂いなし」リーダーの決断と実行」を教訓に、地域防災のエキスパート育成を続けている。

一方、救急医療にとどまらず、危機対応のスペシャリストである秋富氏。東日本大震災でのDMAT（災害派遣医療チーム）の救援活動は『ナインデイズ』（河原れん著）として出版され、広く知られている。2005年の福知山線脱線事故の生々しい現場写真やデータを交えながら、トリアージ（識別救急）の難しさなどを冷静かつ情熱的に話す姿から、この事故が氏に与えた影響の大きさを感じた。

大混乱の現場では「災害発生時の情報の8割は誤報」であり、互いに頑張る姿を想像できないと救援者同士が疑心暗鬼に陥る危険性を指摘し、「災害の見える化」が必要と説く。

越野氏は「津波被害の石碑を作っても、いずれ忘れられる。日常から災害を考える文化を」、秋富氏は「自分の人生すら想定外。常に最悪の想定を」と訴える。これは、行政や住民だけでなく、マスメディアの災害報道にも言えることだろう。

テレビ朝日災害報道担当部長

久慈 省平

**野田 武則** のだ たけのり  
岩手県釜石市長

### 復興の歩みを実感できる年に

「春の星こんなに人が死んだのか」

会場で、岩手県釜石市在住の高校教師で俳人の照井翠さんの句を紹介したのは、東日本大震災がもたらした被害がいかに大きかったかをあらためて思い出してもらうためだったのだろう。釜石市の死者・行方不明者は1千人を超える。「大変悲惨な状況だったことを忘れてはならない」と語る姿に、震災を風化させてはならないとの強い思いがうかがえた。



あの日から間もなく5年。まだまだ課題は残るものの、釜石市では平成28（2016）年度中に復興公営住宅は約9割、自立再建をめざす被災者のためのかさ上げ工事も約8割は完成する見通しという。「復興の歩みを実感できる年にしたい」。この言葉に復興

が着実に進んでいることへの自信を垣間見た。

問題はこうした生活基盤が整った後、新たな釜石をどう作り上げるのか。地元企業の再建や新たな企業の立ち上げ、「橋野鉄鉱山・高炉跡」の世界文化遺産登録を背景とした観光振興……。既に実を結びつつあるのが企業誘致で、復興道路の整備に着目した中国の太陽光パネル製造販売企業が釜石市に物流拠点の建設を進めていることを紹介した。

そして3年後、釜石市でも開催されるラグビーワールドカップ。建設されるスタジアムについて大会終了後は「サッカーなど他のスポーツやコンサートにも利用できるようにしたい」。スタジアムを起爆剤として三陸全体の底上げにつなげたいという。三陸沿岸は将来的に大幅な人口減少が想定されており、沿岸の各自治体が連携して三陸全体の振興策に取り組む必要性を強調した。

会見を通じて印象的だったのは、被災者らとの合意形成に苦心したエピソードを明らかにするなど、被災地の実情を率直に語る姿だった。「不撓不屈」を掲げる野田武則市長。「新生・釜石」「新生・三陸」に向け、その手腕に期待したい。

産経新聞社副編集長 吉田 憲司

すがわら

茂

宮城県気仙沼市長

## 社会課題の解決に伴う復興をめざす

宮城県北東部にあり、太平洋に面した気仙沼市は、東日本大震災で震度6弱から5強の激しい揺れと津波に襲われた。破壊された漁業燃油タンクから流出した重油が燃え広がり、火の海と化した映像は今も記憶に鮮明に残る。市全体が最大で1トント以上も地盤沈下したことも特徴だという。

警察発表で死者1042人、行方不明220人。震災関連死は108人を数える。大震災直前の人口7万4247人は昨年12月末で6万6733人と7514人減少した。一昨年12月末と比較しても924人減と歯止めはかからない。

大震災の1年前に初当選し、現在2期目の菅原市長は、住宅再建、産業復興、地方創生という3つの側面から現状を説明した。復興全体について「過疎地で災害が起きると、民間資本は復興にあまり寄与できない。公的セクターの役割が大きい」と語った。

大震災の年の10月に気仙沼市がまとめた復興計画は「海と生きる」と



題している。過去に何度も津波に襲われながら、海を敵視せず、人間は自然の一部であると対等の関係を築いて海と生活して再起を果たしてきたという意味だ。

基幹産業は水産業である。気仙沼市の製造業出荷額の8割を水産加工品が占めるが、ほとんどの事業所が海岸にあるため被災した。しかもリアス式海岸。菅原市長は「気仙沼ではコンパクトシティーはできない。元の集落を生かし、なりわいとコミュニティを大切にする復興に取り組んでいる」と説明した。

水産業は消費者の魚離れ、資源の減少、就業者の減少などで、日本全体として厳しい局面にある。そうした逆風下で基幹産業をどう復活させるか。観光と水産を融合する魚市場の建設、津波対応型造船施設の整備などを挙げた菅原市長の「復興事業は社会課題の解決を伴うべきだ」との言葉が印象に残った。

西日本新聞社論説委員 大西 直人

みたらい

瑞子

気仙沼ニッティング社長

## 種をまき、いま「脱・被災地企業」を宣言

長い目で見た経済的な復興、御手洗さんの言葉を借りれば「人の暮らしのサイクルを取り戻す」という狙いで、2013年6月に「気仙沼ニッティング」は誕生した。



東京生まれの東京育ち。外資系のマッキンゼーやブータンでの観光産業育成事業に関わった経験を生かし、3・11後は東北の自治体と産業復興戦略を練っていた。国が主導するハード面の復旧が進む一方、生活の場に「もう一度種をまき、芽を育て、森にするボトムアップの取り組みが必要だ」と感じた。だが、待っていても出てきそうにない。「まずは自分がやろう」とオーダーメードのセーターを編む事業に踏み出した。

なぜセーターなのか？ 被災地で

編み手をどう確保したか？ 一着15万円以上の価格設定の理由。編み手の思いや顧客の反応。創業にまつわる苦労やその後の展開は、動画で聞いてほしい。その物語はドラマチックだし、スリリングでもある。

創業時4人だった編み手が、間もなく60人を超える。そこで、御手洗さんは「脱・被災地企業」を宣言した。震災復興の文脈で語られてきた会社、そこを飛び出すことには異論もあるだろう。会見でも、そんな質問が出た。

「震災の記憶や支援の思いが風化していくのを責めることはできない。前に進むとはそういうことです。風化を前提に事業を続けていかなくてはと思っています」と答えた。

その決意は、編み手が見せたある瞬間に支えられているのではないだろうか。初年度から黒字を出し、「これで気仙沼市にも納税できます」という報告に、女性たちは「私たちの仕事があるためになったんだね」と喜び合ったという。

誰かの、何かの役に立つという「仕事の喜び」を多くの人にもたらし。それは被災地という枠を超えて、「人の暮らしのサイクルを取り戻す」という大切な試みである。

毎日新聞社論説委員 中村 秀明

梶田 隆章 たかあき 東京大学  
宇宙線研究所長

## 自然の不思議さ感じて 疑問点、うやむやにしない



い日々が続くが、会見では終始リラックスした様子だった。

「本気で研究者になろうと思ったのは大学院に入ってから」と紹介。東大大学院に進学後、小柴昌俊・東大特別荣誉教授の研究室で岐阜県飛騨市の観測装置「カミオカンデ」の建設に携わった。「カミオカンデ」の準備はそれまで授業で勉強するのとは全く違う世界。一つ一つ確認し積み上げて装置を造っていくのが楽しくてしかなかった」と懐かしそう

に語った。

受賞対象となった「ニュートリノ振動」の成果は、素粒子ニュートリノに質量があることを示した。1986年、カミオカンデのデータに「明らかにおかしい」部分を見つけ、1年かけて精査した上で論文を発表したが「世の中の反応は芳しくなかった」。周囲が心配していると感じつつ「何が起きているか明確にしなければ」との使命感から地道な研究を続けた。その経験を基に「理解できないことをうやむやにしない態度が大事だ」と説く。

次世代を担う子供たちには「本だけでなく自然を見て、その不思議さを感じてほしい」とメッセージを送る。さらに若い人に「自然科学の研究は非常にやりがいがある。研究をする人生を選択肢として考えてほしい」と呼びかける。

一方、若い研究者が定職に就くのが難しいことから博士課程へ進む学生が減っている現状にも触れ「日本の科学界には深刻な問題だ。優秀な人は失業を心配せず研究できるようにならないといけない」とした。さらに今後の課題として「研究者が自由な発想で、科学的好奇心に基づき研究できる風土を保つこと」を挙げた。

共同通信社科学部 深谷 優子

小林 恭子 こばやし ぎんこ 在英ジャーナリスト

## デジタル化と国際化 FT買収の意味



昨年7月の発表から半年。日本経済新聞社による英有力経済紙フィナンシャル・タイムズ・グループ（FT）買収の意味を、英国の視座からひもといたという点で、価値ある1時間半だった。

というのも、1600億円といわ

れる買収額をめぐる議論はともかく、日経が説明するキーワードのデジタル化とグローバル化を真に理解するには、FT

と英メディアの現状について知る必要があったからだ。

小林氏は、英国でも新聞の発行部数が急減しており、2005年に1200万部だった全国紙が、15年秋には684万部まで落ちたことを紹介。新聞も放送も、デジタルコンテンツを提供する会社に変化してきていると述べた。

FTは05年に就任したバーバー編

集長の下で、デジタル化とグローバル化を強力に推進し、紙の購読者数20万人に対し、デジタルは55万人に上っているという。

「デジタルファーストは欧州のトレンド。電子が主、紙は従です」FTは、デジタルファーストからオーディエンスファーストへ。つまり、いかに読者に届けるかを重視しています」。テキストのほか、インフォグラフィックスや動画を使い、どのソーシャルメディアやプラットフォームにニュースを流すのか。ニユーズルームの中心には、読者のアクセス状況を測定するチームを置いているというのだから、従来の新聞編集局とは様変わりだ。

買収による日経側のメリットについては、アジアと欧米という地域的補完関係、FTを通じた英語による日本の情報発信、お金では買えないブランド価値などを挙げた。

FTの戦略は、昨春秋に社長が当クラブで会見した米紙ニューヨーク・タイムズのそれと重なって見える。スマートフォン急速な普及で、メディアを取り巻く環境は激変しているが、これを機に、成長への本格的なグローバル競争が始まる。

時事通信社デジタルメディア事業本部長

宮坂 一平

45

記者ゼミ



## IT時代 新たな 記者の素養とは

香港サウスチャイナ・モーニング  
ポスト グラフィックエディター

セドリック・サム

香港政府が設置した市内の監視カメラやNASAの「ランドサット」の地球観測画像。セドリック・サム氏は、公開されたデータと自身のプログラミング技術を使って制作したさまざまなニュースコンテンツを紹介してくれた。いずれも、従来メディアにどっぷり浸かった私には、思いもつかなかった素材と表現方法で、「メディアは激変期にある」という言葉をまさに実感するゼミだった。

ITが可能にするデータビジュアライゼーションやVR（バーチャルリアリティ）などの新しい表現方法、そして、世界各国で進むオープンデータの動き。いずれも、ウェブでニュースのブランド力を高めるには、必要不可欠な知識だとサム氏は話す。サム氏のような優れたエンジニアやデザイナーと協力できる態勢をいかに築き、良質なコンテンツを生み出していくのか、これからのメ

ディアや記者は問われている。

一方、ITの進化は、新たな課題も突きつけている。スマートフォンの普及で、人々はより早く

簡潔なニュースを求めるようになった。また、PCに比べて小さい画面では、伝えることができる情報量もおのずと限られる。スマホで良質なニュースコンテンツを作る方法は何か、サム氏の答えは「常に技術革新を追い続けるしかない」だった。最先端を持つサム氏でさえ明確な答えを見つけれないことに、絶えず変化するメディアの現状をあらためて感じる事ができた。

サム氏のゼミに先立って、中日新聞電子編集部の松波功氏による暗号メール「PGP」の利用方法の実習が行われた。松波氏は、取材先からの信頼を得るためにも、PGPの利用は記者の最低限のマナーだと話す。ニュースの取材から制作まで、ITはジャーナリズムのあらゆる作業を変えようとしている。

NHK報道局ネット報道部チーフプロデューサー

山本 智

2015・12・11(金)「デジタルジャーナリズムの具体的な手法と展開」/司会：橋場義之特別企画委員/通訳：秋山賛/出席：22人

46

記者ゼミ



## 政治性帯びた 「日本型公平 公正論議」

けん た 山田 健太 専修大学教授

やま だ 山田

記事を書くときに、歴史の縦軸と周囲を見渡す横軸は基本である。昨今の新聞やテレビ報道に対する偏向批判や公平公正について考えるときにも、この視点が欠かせないことを山田さんのゼミからあらためて学んだ。

まず、客観、公平、中立という言葉はどのようなに生まれたのか。歴史をひもとくと明治初期の政論新聞からの転換があり、不偏不党と中立報道によって部数を拡大し、富国強兵路線にのって日本のトップ企業として新聞社が成立していく過程がみえてくる。「あまねく普及」と政党性の排除を前提として、他の国にはない選挙広告や政見放送も可能になる。経営上の特恵的待遇も得る。

山田さんは、こうした新聞を中心としたマスメディアの歴史、実情を踏まえて①政権批判の抑制②国益を必要以上に意識③政府発表を間違いないで伝達する、というのが客観中立

報道の実相で、「政治との距離を非常に意識した紙面づくりをせざるを得ない」と、手厳しい。

一方、欧米などの報道倫理規定における公正とは、少数意見のすくい上げと配慮、反論機会の提供である。政治的な公平さが問題になることはほとんどない、ということをしちんと押さえておく必要がある。

公平公正論議に関連して、山田さんは、従軍慰安婦報道などが問題になった一連の朝日新聞バッシング以降、同紙が「両論併記を徹底してやっている印象を受ける」と感想を述べた。それは、質的な公正さにも多角的な論点の提示にもならない。両論併記では現状維持の力が強く働くし、そもそも社会に対して問題提起していくのがジャーナリズムの本来の役割だ、と熱弁をふるった。

「言論・表現の自由」が問われている時代に、当事者のあなたは傍観者になっていませんか、とコッソリと一撃、覚醒を促されたゼミだった。朝日新聞ジャーナリスト学校主任研究員

早坂 敏文

2015・12・18(金)「報道の公正・多様性」/司会：橋場義之特別企画委員/出席：参加10人+ネット視聴5人

## 福島第一原子力発電所取材団 (1.25～27)

東京電力福島第一原発の構内を見て回るうちに、「非日常の日常化」という言葉が頭に浮かんだ。

事故から約3年間に、何度か構内を取材したが、津波で壊れた車両やタンク、機器はそのままだになっていた。仮設のケープルや配管が地をはうように走り、免震重要棟で作業員が行き交う様子も野戦病院のような雰囲気だった。

ところが今回、ケープル類は整理され、清潔そうな作業員用の食堂や大型の休憩所、大きな事務棟も建てられていた。小野明所長は「長期戦に備えることが必要」と語ったが、長い闘いに向けた奇妙な安定感さえ感じさせた。作業員は約6500人に膨れ上がり、廃炉はもはや一大事業といえる。日本原子力研究開発機構(JAEA)が近くに廃炉技術開発の大型試験施設を建設するなど、研究開発の拠点化も進む。

### 奇妙な安定感「非日常の日常化」

企画委員  
朝日新聞社編集委員  
服部 尚



3号機は建屋上部のがれきを撤去、17年度中には燃料取り出しのアプローチを始める予定

一方で、見えない放射能リスクにあらためて気づかされた。計測器が示す放射能の数値の最高は水素爆発を起こした3号機と4号機の間にある排気筒。毎時233マイクロシーベルトを記録した。5時間いけば公衆被曝線量限度の1ミリシーベルトに達する。原子炉付近は致死量レベルであることを思い起こさせた。

炉心溶融を起こした1～3号機の原子炉内の状態はまだ把握できていない。汚染水の抑制もこれからだ。「非日常」は続いている。

〈日程〉(参加:34社39人)

1月25日(月)A班が福島へ▼Jヴィレッジで概要説明の後、東京電力福島第一原子力発電所取材・1～4号機建屋周辺、陸側遮水壁周辺(防護服を着用してバスから下車)▼バス車内から高性能多核種除去設備、汚染水タンク群など▼大型休憩所▼小野明所長への取材  
1月26日(火)いわき駅前でA班、B班合流▼周辺取材・松本幸英・楢葉町長会見、ここなら商店街取材▼

### 「現実」置き去りの永田町政治

先日の施政方針演説で安倍晋三首相は東京電力福島第一原発事故に関し、わずかに「廃炉・汚染水対策を着実に進める」と言及しただけだった。「着実」とは何だろう。

福島原発の広大な敷地とその周辺

には東京・永田町とは異なる時間が流れている。いらだつような遅々とした時間だ。「登山に例えるならば1合目辺りでしょう」と第一原発の小野明所長は廃炉作業の



建屋近くの高台でバスを下車。左はがれき撤去に向けてカバー解体を進める1号機。右は水素爆発を避け、建屋が残った2号機

状況の説明した。確かに以前に訪れた時と比べ、がれきの撤去は進み、作業環境は改善されている。しかし傷口に緊急措置を施したにすぎないのではないか。

廃炉に向けたロードマップには30～40年後に「廃止措置終了」と書いてある。だが何をもって「終了」とするのかが決まっていないう。更地にするのか、建屋は残すのか。ゴールが決まらない状況では「着実」の言葉は意味を持たない。

小野所長は2020東京五輪に向けて首都圏の準備工事が本格化する中、作業員をどう確保するのか計画を練る必要性にも言及した。施政方針で首相は「挑戦」の言葉を繰

日本原子力研究開発機構楡葉遠隔技術開発センターで取材・バーチャルリアリティ訓練、原子炉格納容器下部実規模試験体、ロボット実証試験設備(モックアップ階段、試験用水槽、モーションキャプチャ)▼いわき駅でA班解散、B班はいわき泊  
1月27日(水)B班が福島第一原子力発電所取材(行程はA班と同様)▼いわき駅経由、東京駅で解散  
【写真】代表撮影 小川昌宏・毎日新聞社写真映像報道センター

東京電力福島第一原発に向かうバスの車窓から、国道6号線沿いの大熊町の街並みを眺めていた。見えるのは原発作業員を乗せたバスと除染作業員の姿だけ。帰還困難区域に指定された国道沿いの家は静かに、確実に朽ち果てつつあった。

り返し、「東京五輪の成功に全力を尽くす」と表明している。発生からわずか5年。永田町の政治は福島の実態とあまりにもずれているのではない。目先の課題を追い掛け、先を急ぐ政治が失っている責任感や謙虚さの言葉を思い起こさせられる機会だった。

企画委員 共同通信社論説副委員長

川上高志

枯れた雑草に覆われた水田の中に、  
2匹の茶色い動物がいた。ずんぐり  
した体型はイノシシの親子のよう  
だ。彼（彼女）らには国が定めた区  
域など関係ない。土を蹴る姿は実に  
堂々としていた。

約2年ぶりの福島第一の取材だったが、構内ですれ違う作業員の皆さんが、元氣よく挨拶をしてくれたことに強い印象を受けた。汚染水問題などに翻弄され、先が見通せなかった状況に、かすかではあるが光が差し込んできた。そんな現状が表情に反映されているように思えた。「収束」からようやく「廃炉」の段階に入ろうとしているのかもしれない。

防護服を着ないで移動できる地域も増えた。粉じんを抑えるため、モルタルを吹き付ける対策が進み、一部地域の放射線量は減った。しかし1〜3号機の格納容器の中には状況把握すらおぼつかず、溶け落ちた核燃料をいつ取り出せるのか、予測不能な状況は変わらない。廃炉まで短くても30〜40年。気の遠くなるような仕事に向き合う作業員の皆さんに感謝、感謝の一日だった。

企画委員 東京新聞社会部長

瀬口 晴義

○未稼働の青森・六ヶ所はどうなる

初めて東電福島第一原発に入った。これまでは報道で情報を得るだけで原発事故を現実として捉えられない面があったが、現場の緊張感を肌で感じ、事故の過酷さ、廃炉に向けた道のりの険しさを知る機会となった。原発の再稼働が進む中、青森県にある六ヶ所再処理工場は未稼働のままだ。核燃料サイクル事業は岐路を迎えている。国、事業者が事故の教訓をどう生かしているのか。注視し続けていかなければならないとあらためて思った。

陸奥新報社 齊藤 雅也

○途方もない時間を実感

初めて福島第一原発を訪れた。1日約300トン発生する汚染水処理のために今後も増え続ける貯蔵タンク、炉内の放射線量が高く溶け落ちた核燃料はどこに、どうあるのかも特定できない状態。解決への道筋はまだまだ不透明で、廃炉へ30年、40年といわれる途方もない時間の長さを実感した。地元大分県の佐賀関半島から海を挟み約45キロに位置する伊方原発(愛媛県)をはじめ、原発再



昨年6月にオープンした大型休憩所の食堂では、1食380円で、昼は5種、夕方は3種類のメニューが提供されている。食事を作る給食センター（大熊町）も訪問した。

稼働の動きが進んでいる。今回の取材を原子力政策のチェックに生かしたい。

大分合同新聞社 渡辺 大祐

## ○惨状そのままの現実

2年ぶり3度目の福島第一原発は、以前に比べ線量も下がり、作業員の労働環境も改善され、落ち着いた様子。ただ3号機原子炉建屋は、がれきは撤去されたものの、爆撃でも受けたように破壊されたままの姿をさらしていた。この惨状が5年たってもそのままという現実を目の当たりにして、あらためて原発事故の深刻さを思い知った。日本原子力研究開発機構の遠隔技術開発センターでは廃炉に向けた最新技術などを取材したが、やはり日本の技術は大したものだなと感心する半面、この人たちの頭脳をもつてしても原発事故は防げなかったのだと感じた。

読売テレビ 春川 正明

慰安婦問題 日韓合意

大貫 智子(毎日新聞社)

## 国交正常化50周年に示した 「握れる」信頼関係

横長の茶色いテーブルに日韓9人ずつ、ハンゲルで書かれた出席者の名札が並ぶ。昨年12月28日午後1時45分。私は2時からの日韓外相会談を前に場内の様子をメモに取った。韓国の尹炳世外相の席には「外交部長官」と書かれた真っ白なメモ用紙が置かれていた。ここにこれからどんな言葉が書き込まれるのかと想像すると、歴史的瞬間に立ち会っているという緊張感が胸が高まった。

開始数分前、韓国側の外務省関係者が入ってきた。過去12回の局長級協議で交渉の最前線に立った白髪の李相徳東北アジア局長に「お疲れさまでした」と声をかけると、うなずいた。間もなく、両外相が握手を交わし、双方の出席者が席に着いた。日本側出席者の知人の1人と目が合った。彼は、目でにっこりあいさつを返してきた。今日この場で、慰安婦問題は合意するのだと確信した。

ただ、大方の予想は曖昧な政治決着を図るのではないかというものだ

った。私は、韓国人の友人から送られてきた、韓国政府が韓国メディアにエンバーク付きで伝えた合意内容を見て目を疑った。

### 韓国の「満額回答」に驚く

「慰安婦問題は軍の関与下、女性の名誉と尊厳を傷付けた問題として日本政府は責任を痛感する」「安倍内



韓国外務省で行われた日韓外相会談後の共同記者会見(筆者撮影)

閣総理大臣は、日本国内閣総理大臣として謝罪する」「韓国政府が財団を設立し、日本政府の予算で一括拠出する」――。これでは韓国にとって満額回答ではないか。前日に、日韓関係の専門家に取材した際、韓国側が重視するとしていた点が全て含まれている一方、日本側が強く求めていた、ソウルの日本大使館前の少女像撤去問題や、最終解決とすることには含まれていなかったからだ。

会談後の共同記者会見が始まり、韓国政府が事前にメディアに伝えていた部分は、韓国側が成果として強調したい内容だったことが分かった。少女像や「不可逆的」との合意内容は韓国国内で強い反発を呼ぶことが予想され、この部分に焦点が当たらないようにしたのだと思った。

しかし、かつて「対日強硬派」と称された尹外相自ら、「この問題が最終的で不可逆的に解決することを確認する」と述べたうえで、少女像移転問題にも「努力する」と堂々と述べる姿を見て、合意への強い意思を感じた。

「岸田外相とともにこの場で交渉妥結宣言をすることを大変うれしく思う」とまで言い切った時には、目の前で起きていることが信じられな

### 現地保守層で高まる評価の声

3年半もの間、首脳会談が行われない「過去最悪の日韓関係」と言われながら迎えた国交正常化50周年の2015年。1年前、多くの日韓関係者は「歴史的な年だ」というのに一体何ができるだろうか」と展望を見いだせないでいた。慰安婦問題という20年来の懸案解決にまで至る大きな要因となったのは、両首脳をトップとする関係悪化が、双方の国民感情にまで深く入り込んだしまったことだったと思う。植民地時代からの流れて日本語での交渉が可能だった過去の特殊な関係ではないものの、今も両国は水面下で「握れる」信頼関係があることを示した合意だった。

予想通り、特に韓国側では反発が出ていたが、北朝鮮の4回目の核実験が背中を押す形で、合意を評価する声が保守層では高まっている。時差がなく、相手国の言葉を解する人が多い日韓間では、ちょっとしたことで国民感情が大きく揺れることがある。不用意に対立をあおらないよう、言葉の翻訳一つにも一層気をつけていきたい。

おおぬき・ともこ▼2000年入社 前橋支局 政治部を経て 11年10月外信部 13年4月からソウル支局

宜野湾市長選

斎藤 学（琉球新報社）

## 大差で現職再選も 「オール沖縄」批判には疑問符

沖縄では29年ぶりのあられが本島各地で舞い落ちた投票日だった。1月24日の宜野湾市長選挙は、そんな気候を象徴するかのように取材も意外続きだった。米軍普天間飛行場の移設手法が最大争点と、マスコミが見据えたこともあり、全国からの注目度も上がった。

宜野湾市を取材エリアに持つ中部支社は、極東最大の米軍嘉手納基地の門前町の1つ・沖縄市にある。本紙では昨年12月末に市長選挙の世論動向を探る第1回の世論調査を行ったが、その際に複数件、読者からクレームともつかぬ電話があった。

「琉球新報が世論調査をやっていると電話があったが、本当にやっているのか」

間違いなく実施している旨答え、話を聞けば、何件も世論調査と称した電話がかかっていると話す。「戸別に思想調査をされているようで、答えるにも答えられない」と言う。もはやどここの選挙でも同じ傾向で

あると思う。政党や各種団体が独自に調査を実施している。それは選挙戦での情報戦を制する説得根拠にも活用されているように、何せ、その回数が半端ではない。

### 「鳴りっぱなし」の調査電話

当日有権者数が7万2526人、世帯数にして4万1千余の市である。固定有線電話を所有する世帯は、さらに絞り込まれるわけで、調査の集中する週末の固定電話は「鳴りっぱなし」との冗談ともつかぬ会話が飛び交った。しまいには「もうさつき答えたよ」と、愛想も尽きて受話器を置く人もいたという。

自民党の調査は、複数回に及んでいる。これに別政党、各種団体、マスコミも加われば、うんざりするほどの回数だったことは想像に難くない。各種調査の収集を進めると、中にはぶれた数値もある。どの程度の正確さかは知る術もない。取材を進めるほどあらゆる数値が入り乱れ、

混乱に拍車を掛けた。取材はいかに情報をさばくかに重点を置いた。

大半の情報がそうだが、まずは人からの口頭情報については聴取人を選別し、さらに情報根拠の分厚さで優劣をつける仕分けをした。そうすることで大まかではあるが、終盤には世論動向も見えてきた。

### カラー分かれた2氏の選挙戦

選挙戦は、自民党が国政選挙並みの布陣を敷いた。とりわけ水面下での、見えない選挙戦は熾烈を極めた。閣僚経験者も含め自民党国会議員の動員人数はカウントできる範囲で30人以上に及ぶ。街頭に立つて演説するわけでもなく、大半が来県前に決



当選した佐喜真淳氏を取材する報道陣（琉球新報社提供）

め打ちした企業回りを徹底した。国會議員は動員しても表には出ず、辺野古を想起させないよう細心の注意が働いたようだ。

対する翁長雄志県知事らオール沖縄を背景にした志村恵一郎候補側は、企業支援もあり「業者票のまとめ方」講座など新手法もあったものの、オールソックスな選挙戦に終始した。そして何より選挙戦を制した要因の1つは、昨年返還された米軍基地跡地「西普天間住宅地区」の今後にあったといえよう。51ヘクタールの広大な土地には、琉球大学医学部の移転など国直轄事業がめじる押しで、業者が色めき立たんはずがない。デイズニリーゾートの誘致に加え、市長選の布石は昨年から打たれていた。

選挙は5857票という大差で佐喜真淳氏が再選された。これを根拠に政府は「オール沖縄」という民意の枠組みを批判し始めている。しかし佐喜真氏も個人的考えとはいえず、名護市の辺野古移設には反対の姿勢を示した。短絡的な物言いでは移設を強行すれば、政府は回復不能なダメージも想定しなくてはなるまい。

さいとう・まなぶ▼1991年入社  
京支社報道部長、整理部などを経て  
在 中部支社報道部長 現 東

## SMAP解散騒動

阿部 公輔（スポーツニッポン新聞社）

視座によって分かれた報道  
「存続」確信し独走、連日スクープ

昨年大みそか。「三船美佳&神田正輝交際」「綾野剛熱愛」など芸能スクープ5連発で下派手に元日付1面を飾りながらも、心配で心配でしうがないことがあった。

「SMAP大丈夫かな」「こればかりは確定しないと……。でもどこか（記事を）入れてたら痛すぎですね」「今はその時を待つしかないか」

ジャーニーズ担当の小枝功一記者と昨年夏すぎから取材を進めていた特ダネが「SMAP独立」だった。しかし、情報は「木村拓哉残留、グループ分裂」「独立失敗」「全員残留」など目まぐるしく変貌。何が「事実」なのか分からない状態になっていた。

## ついに確執劇決着か

その時が来たのは年明け1週間後。「女性マネジャーが1月12日に解任される」との情報が飛び込んできた。

日本だけでなく世界が驚いたこの騒動の本質は、ジャーニーズ事務所の



「SMAP」の文字が躍る紙面（スポニチ提供）

副社長とSMAP育ての親といわれた女性マネジャーの確執に全て起因する。芸能界の独立劇といえ、メンバー間の不仲や事務所への不満が要因となるが、今回はそれがない。あくまで「女帝」2人の確執劇であり、この決着の仕方が全てを決める。女性マネジャーの進退の「Xデー」を、われわれは待っていた。

だが、当日。解任ではなく「辞任」

になった。担当記者がジャーニーズ事務所の広報責任者に連絡を入れると「顧問弁護士と話して」。これまでもジャーニーズでさまざまな騒動はあったが「弁護士を通して」と言われたのは初めてのことだった。

なぜ弁護士なのか。なぜ辞任なのか。一方で「木村残留、中居ら4人退社」「5人とも残留へ」と情報が真つ二つに割れた。記事を書きながら取材を続け、次第に分かってきたのは、昨年からの膨大な情報は錯綜などしておらず、全て「当たり」だったのである。

つまり、この騒動に対する取材相手の視座によって「分裂、解散」にも「全員残留」にもなり、「独立」にも「退社」にも映るのである。そしてお互いの誤解が、それぞれの視座をさらに離していったのだ。

## 12日間連続1面

正確に報道するため現状を俯瞰して見るのに必要だったのは、この日起きた「事実」だった。解任されるはずの女性マネジャーが自ら「辞任」したことは、もはや独立しようとしている者はいないことを指すのではない。弁護士が立っているのは昨年9月の契約更新が関係している、メンバー4人は当時からずっと

「独立派」扱いされているだけで、実態は戻れないだけなのではないか。

選んだ1面の見出しは「分裂危機、木村残留、中居ら退社へ」。最終版では「退社も」とさらに後退させた。

同時スクープとなった日刊スポーツは「独立、解散」。刺激的な論調以上に、記事の中身に違いがあった。

芸能史上最大のニュースを「独走」できる——という期待は、翌日には確信に変わった。後追いしてきた他紙も「独立解散」の論調の中、スポニチだけが「存続」への具体的な動きを連日スクープ。中でも、木村拓哉が電話で存続を直訴した特ダネは決定打となり「分裂回避」もいち早く報道。存続表明後も「SMAP再生 草薙がキーマン」など事態の推移をドンピシャで当て続け、創刊67年ですべて芸能ニュースが12日間連続で1面を飾った。

小枝記者とは、2012年のオセロ中島洗脳騒動でも「中島奪還」などの特ダネを連発した。その時に学んだのは視点、視野、そして視座。渦中の当事者でさえ全体像が見えていない問題を浮き彫りにするのに、何が必要なのか痛感していた経験は大きかった。

あべ・こうすけ ▼1992年入社 音楽担当などを経て 現在 文化社会部長

私が会ったあの人

## 「真実は執拗なり」の人

反原発の弁護士 藤田一良さん

山崎 一夫（毎日新聞社）

少壮44歳にして白髪、大人の趣の弁護士「いちりょうさん」と初めて会ったのは松山市の裁判所近くのホテル。記者生活3カ月目からのつきあいは、私が大阪の検察特捜部担当や司法キャップの時に濃く、2013年の夏に亡くなるまで40年に及んだ。

3・11の福島第一原発の事故の後、「反原発」は小出裕章氏が知られる。彼が大学院を出たての原子力工学研究者として参加したのが1973年8月、愛媛県の伊方原発の周辺住民35人が田中角栄総理大臣（当時）を相手に国の原発設置許可の取り消しを求めて訴えた「伊方原発訴訟」。藤田一良さんは、その住民側弁護団長だった。

日本で初めての原発行政訴訟を担う高ぶりはみじんもなく「カネにならんピンボーガミ裁判やで」と笑う一方で、新聞のコラムで「貧

乏弁護士」と書かれた時は怒った。熱く語る時も実は冷静、皮肉は大好きだが、冷笑家では決してなかった。

農民組合指導者の父譲りの反権力意識に加え、司法研修所時代、口達者な弁護士の卵をまとめ「フジタ組」と呼ばれた組織人でもあった。

「引き受けた限りはマジメに法廷で戦う」というこの人に率いられた裁判に、国側はナメた対応だったと私は思う、いわば「たかが田舎での裁判」みたいな。弁護団を「反原発」を宣伝したいだけのアジテーター集団と見誤り「原発の安全性を国民に宣伝する場」と受けて立ったのが思惑違いだった。

平常時の被曝から、原発事故の可能性まで、50人に増えた弁護団が原子力分野の専門家を揃え、法廷は国側の専門家との間で公開安全審査の様相を帯び、国側の守勢は弁論を経るごとに明らかになった。裁判所か

らは安全審査資料の提出命令まで出されてしまった。

審理のほとんど全てを担当した裁判長を結審間際に転勤させ、新裁判長のもとでの78年4月の判決は原告側全面敗訴。これは原発の安全性の勝利ではなく「司法行政の勝利」ともいえた。

メディアがニュースで取り上げる裁判も多く手がけた。人権派弁護士と呼ばれるのは拒まなかったが、本人は「やりたかったテーマにぶち当たっただけ」と聞いた。32歳で略血、療養のため会社を辞め、生きている間に成し遂げたい「何か」を求める意識もあっただろう。

新興俳句の鬼才、西東三鬼の裁判を持ち込んだ俳人の鈴木六林男さんや、在日の詩人、金時鐘さん、さまざまなジャンルの音楽家との交遊もあったから、私もよく飲み、藤田さん



原発反対訴訟について講演する藤田一良弁護士（2011年11月26日／神戸市中央区／共同通信社提供）

主宰のコンサートでもよく遊んだ。ある時、「あいつ（鈴木さん）は僕を、俳句を知らん弁護士と言うんや、けしからん奴や」と笑いながら言った事がある。にわか勉強ではなく、文化への造詣への自負は強かった。事務所にも自宅にも、専門の法律書よりも文化、芸術の本が圧倒的に多かった。

「それど真実は執拗なり」とは84年の高松高裁の敗訴から言い始め、最高裁での敗訴（92年）以降も言い続けてきた。真実は、その時には認められなくても、時間をかけてジワジワと効いてくる、というような意味ですね、と聞くと「ま、ま、そんなもんや」と笑って答えるだけだったが。

原発情勢は、福島第一事故のあと複数の元首相が「即停止」を主張するまでに変わってきた。だが、いちりょうさんは多くを語らなかつた。既にやれることはやった、という意識だったかもしれない。（やまさき・かずお 毎日新聞グループホールディングス常勤顧問）

次号は岡田実さん（前・北海道新聞社専務）にバトンが渡ります。

# 9・11から15年 今思うこと

谷村 啓



たにむら・すすむ  
1971年NHK入局 報道局経済  
部記者 ロンドン特派員などを  
経て 99年アメリカ総局長 そ  
の後 米法人テレビジャパン社  
長 (公財)放送文化基金専務理  
事 現在(株)エミューズ・イン  
ターナショナル顧問

昨年11月にパリで発生した同時テロは言うまでもなく、世界各地で頻繁に起きる悲惨なテロのニュースに接するたびに、15年前の「9・11アメリカ同時多発テロ」を強烈に思い出す。

1999年にNHKアメリカ総局長としてニューヨークに赴任し、20世紀後半に最強となったアメリカの最後の輝きを見たのだった。しかし、大統領選の混乱の直後に幕を開けた21世紀は、2001年9月11日の同時多発テロをきっかけに、アメリカが急速に輝きを失う時期でもあった。

9・11からイラク開戦までの1年半、限られた態勢で、無我夢中でニュース取材、番組制作、日本への放送に明け暮れた。あの日、あの時、目の前の事象、出来事に翻弄され、

立ち止まって考える余裕もなく仕事をしただけという充足感の半面、もっと広く、深く、長い目で取材、制作ができなかったかという不完全燃焼感は今も消えない。思い出すままに記す。

## ◆何が人の生死を分けるのか

WTC(ワールドトレードセンター)には北館と南館の2本の高層ビルがあった。9月11日午前8時46分、テロリストの最初の飛行機が北館に突っ込み、火災が起きた。

南館にあった富士銀行ニューヨーク支店では、支店長以下みんなで避難しようということになり、エレベーターでいったん、下へ降りた。途中のエレベーター乗り換えホールで、館内スピーカーから「北館は火災ですが、南館は大丈夫です」とい

うアナウンスがあった。そこで、どうしようかとなった時、アメリカ人行員たちは「北館の火災はテロに間違いはない。私たちはこのまま降ります」と言った。

支店長はじめ日本人行員12人は「オフィスに戻って、東京に連絡をして、鍵を掛けてくる。皆さんは、このまま降りてください」と言っていて、そこで上下に別れた。支店長たちが、オフィスに戻った直後に2機目が突っ込み、大変残念なことに12人は犠牲になった。1機目突入からわずか17分後の午前9時3分だった。

なぜ、支店長たちはオフィスに戻ったのか？ 私たちの取材に対してアメリカ人の部長は「8年前に同じWTCの地下で起きた爆破テロを身をもって覚えているので、とっさに

今度もテロだと確信した。それに、情報がない中、館内放送で流れた「南館は大丈夫」というアナウンスが、支店長たちの判断を狂わせたのかもしれない」と話してくれた。

## ◆飛行機を降りた乗客がいた

9月11日の早朝、ボストンの投資銀行のディーラーが、出張のためボストン空港のロサンゼルス行きアメリカン航空11便の待合所にいた。そこで彼は、異常に興奮した5人のアラブの若者が、肩を叩き合ったり大声で喋っているのを見て、強い違和感を感じた。やがて搭乗時間になり機内に乗り込むと、それまであれほど騒いでいた5人が、とても深刻な顔して通路際の席にバラバラに座っていた。それを見た瞬間、彼は踵を返して飛行機から降りてしまった。

それから1時間余りたった頃、彼が乗るはずだった飛行機がニューヨークのWTCに突っ込んだというニュースが空港にも流れた。「どうして自分だけ飛行機を降りてしまったのか。なぜ、周りの人や関係者に、おかしいということを伝えなかったのか」と強い自責の念にかられたという。後日、このディーラーに取材を試みたが、直接、彼の口から話を聞くことはできなかった。

話は変わるが、災害や事件、事故に際してのテレビインタビューは、相手の映像と音声が不可欠だけに難しい取材になる。その意味で、東日本大震災の後、NHKが放送を続けている被災者の証言を集めた「あの日 わたしは」は、後世に教訓を伝える貴重な番組の積み重ねだと思う。

### ◆揺れるアメリカ社会の実相 どこまで伝えられたか

9・11の後、アメリカの世論は戦争に大きく振り子が振れた。歴史上初めてアメリカ本土が攻撃されたの思い。9・11の1カ月後にアフガニスタンでの戦争が始まり、家々はもちろん、車でもどこでも星条旗がはためき、人々は集まれば「ゴッド・ブレス・アメリカ」を歌い、「ユナ

イテッド・ウィ・スタンド」のスローガンを掲げた。郊外の住宅街では星条旗と共に黄色いリボンを付ける家も少なくなかった。予備役編入で昨日までオフィスで一緒だった仲間が兵役に就くことも珍しくなかった。

突然、戦時下の日々の感があつた。加えて、不可解な「炭疽菌事件」やニューヨークのケネディ空港近くで起きたアメリカン航空の原因不明の墜落事故。こうしたことが醸成するアメリカ社会の、またいつテロがという不安な空気や気持ち、振り子を大きく振ったと思う。

その一方で、戦争反対の動きはあったし、9・11の犠牲者の家族のグループが取り組んだ戦争に反対する動きもニュースにし、番組にもした。しかし、今思うと、9・11の後、アメリカ社会の振り子の振れ方を現象、事象、局面では伝えたものの、なぜそこまで振れるのか、背景にあるアメリカ社会の空気や人々の気持ち、問われた問題を、日本の視聴者に十分伝えることができたかどうか。

今、複雑化と混乱を極める中東問題やIS問題、ヨーロッパでの難民問題等々を見ると、あるいは現在進行形のアメリカ大統領選を見ると、民族対立、宗教対立、人種問題

が希薄な日本、難民受け入れがごくわずかな日本を基準に問題を捉えることは難しい。

だからこそ海外からの報道は、起きた事件や現象面だけでなく、その背景にある、国、地域、社会、人々の空気や暮らし、歴史、文化までを日本の読者、視聴者に伝えることが報道の使命だとあらためて思う。

### ◆アメリカ主導のイラク開戦と国連

アフガニスタンでの戦争が始まってからちょうど1年後の2002年10月、アメリカはイラク査察の安保理決議を出した。意外にもイラクは査察を受け入れたが、結局、大量破壊兵器は見つからなかった。にもかかわらずアメリカは、イラクには大量破壊兵器が存在すると主張（後に、これは全くの虚偽の情報に米英がだまされたことが判明し大問題になる）。最終的に2003年3月に米英は、安保理の承認が得られないまま、有志連合の形で、一方的にイラク開戦に踏み切った。

ここに至る3カ月余り、国連安保理では、イラク攻撃急先鋒の米、英、それにスペイン（非常任理事国）と反対派のフランス、ロシア、それにドイツ（非常任理事国）が鋭く対立。間に挟まれたチリ、メキシコなど中

間派の非常任理事国は、賛成派から激しく腕を引つ張られたが、反対の姿勢を崩さなかった。

当時、ニューヨークのフォード財団で研究生活を送っていた緒方貞子氏は「国連にもアメリカ一国支配から脱却しようという変化が起き、近い将来、国連が変わるかもしれない」と話した。だが、今日に至るまで安保理改革の動きは、国連ミレニアム総会の頃の盛り上がりはなく、イラク攻撃を主導したアメリカは、泥沼の戦争にはまり、アメリカ一強の自信は崩れたとはいえ、国連は依然、米、露、中の一国主義に左右されている。

今年、5年ぶりに非常任理事国になった日本は、集団的自衛権＝日米同盟強化に振り子が振れているように見える中、集団的安全保障＝国連による平和維持や地球規模の問題解決のための多国間の枠組みを強化する方向に振り子を戻す取り組みも求められているのではないかと。

最後に思い出したことをひとつ。あの日、2001年9月11日は、国連本部で秋の国連総会を前に、恒例の「平和の鐘（日本が寄贈したもの）」をつくせレモニーが午前中、予定されていて、私は取材でちょうどアパートを出る時だった。

## 観ました 文楽の表と裏

1月の大阪・国立文楽劇場は、太夫（義太夫を語る人）でただ一人の人間国宝である八代目豊竹嶋大夫師の引退披露公演が行われた。

日本記者クラブの大阪文楽ツアー

は今回で2度目だが、第1回の昨年4月は人間国宝で文化勲章受章者の竹本住大夫師引退披露公演で、文楽にとつての大きな節目に立ち会うツアーが続いた。

1月8日には夜の部の「国性爺合戦」に先立って、文楽を裏で支えている方たちの活動を拝見した。

文楽人形のキモは首だろ。人形師の村尾愉さんによると、大阪大空襲で多くが焼失したが、それでも現在およそ20種類300以上あり、なかには江戸時代後期の作まで含まれているという。「日高川入相花王」の清姫の美しい顔が、一瞬で眼をカットと見開き、口が耳まで裂ける。細工の精妙さにはまさに、びっくりぽん。人形の髪はみなカツラで、髪型は男性80、女性40種ほど。結髪は床山の担当だ。女性床山第1号の高橋晃子さんが教えてくれたところでは、



人形の1つ1つが“役者”になる

ほとんどが人毛だが、ヤクのしっぽを使う部分もある。最近、外国でも女性の髪が短くなってきた毛の入手が容易ではないそうだ。

もう1つ大切なのが衣装。担当の

米田真由美さんによると、公演の3、4カ月前から制作にかかる。人形遣いの好みで着物の襟を太めにしたたり細くしたり、同じ役の人形でも微妙に違う。着付けは操りやすいように人形遣いが自分ですると聞いた。

9日は昼の部で、嶋大夫師引退披露の挨拶（といつても、歌舞伎と違ってご本人は一言もしゃべらない）や「関取千両幟」などが演じられた。開演の前に人形遣いの吉田幸助さん

に舞台裏を案内していただいた。芝居の舞台と違って、人形遣いの足が見えない「船底」といわれる構造や、迅速な舞台転換の仕掛けなど文楽の裏表を堪能した。大物が相次いで引退したが、若い世代も育っており、この節目も必ず乗り越えるだろう。

東京新聞出身 塚田 博康

1・8（金）9（土）参加者13人

## 新企画「チェンジ・メーカーズに聞く」

今月からスタート

生き残る種は、最も強く、知的な種ではなく、変化に対応した種である。進化論のダーウィンが言ったとされる警句だが、時々刻々と変わる環境に人や会社、国が変わり続けるのは難しい。変わり続ける術に普遍的な解決策はないのだろうが、私たちは「チェンジ・メーカーズ」の先例に学び、ヒントぐらいは得ることはできる。そんな狙いで、新企画を立ち上げた。

日本経済はほのかな明るさを見せ始めたとはいえ、中長期に自律的に成長できる保証はまだない。マクロ経済政策は経済活動の下支えにはなる。だが、変化し、成長への原動力を生み出すのは現場で起きている「チェンジ・メーカーズ」の奮闘である。

新企画ではロボット技術や自動運転技術など社会構造を変え得る技術、働き方を見直すとする動き、ニュービジネスの創造などの最前線で活躍するプレーヤーを企業規模の大小にかかわらず招き、変革の要諦、課題を聞く。「チェンジ・メーカーズ」の発言は、記事や番組をつくるためのアイデアにも結びつくはずだ。加盟各社の記者諸兄には新企画をぜひ生かしてほしい。

企画委員 朝日新聞社編集委員 安井 孝之

## ■会議報告

## ●第459回企画委員会

（1・12 会場）

今後のゲスト選定について協議したほか、5月の総会記念講演講師候補を検討した。夏の記者研修会の担当委員を委嘱した。

出席 西村委員長、星、安井、倉重、坂東、福本、橋本、脇、別府、宮田、杉田、川上、軽部、加藤、山本、瀬口、島田、山崎、川戸、川村、和田、堀、ワグネル、梶本の各委員。

## ●第369回会報委員会

（1・13 小会議室）

新委員の吉澤正一・日本新聞協会事務局次長兼経営業務部長（広告担当）（旧・佐塚正樹氏）が挨拶した後、

12月号と「クラブゲスト」面を刷新した1月号について意見交換した。

ゲストの印象的な言葉を紹介していたフロント面の「今月のことば」欄は新設した「ゲスト一覽」との重複感があるので2月号から取りやめることにした。このほか2月号の編集と3月号掲載の「3・11から5年」特集についても検討した。

出席 飯塚委員長、高橋、鈴木、渡邊、向山、吉澤、大寺、藤井の各委員。

## ●第461回会員資格委員会

（1・13 小会議室）

2月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 小田委員長、齋藤、新堀、小池、播磨、山本、青木の各委員。

## マイBOOK マイPR

### ■戦場記者

#### 「危険地取材」サバイバル秘話

石合 力

(朝日新聞社国際報道部長)

危険地取材を考える 「大臣の指示です。即刻出国してください」――

後藤健二さん拘束のさなか、外務省幹部から私にかかってきた電話が執筆の動機です。政府の海外安全情報(危険度)に従って取材規制することは妥当なのか。朝日新聞のシリア取材を批判的に報じた一部メディアの動きも踏まえ、報道の自由と邦人保護の関係、記者の安全確保の方策について考えてみました。「爆弾テロ現場には急ぐな」といった危険地取材のエピソードにも触れています。



朝日新書 842円

### ■愛しのドラゴンズ!

#### ファンとして歩んだ半世紀

北辻 利寿

(CBCテレビ報道局長)

ドラゴンズ80周年でファンが書く本を! 出版社からの依頼を受けて、中日球場(現ナゴヤ球場)近くで生

まれ育ったファンとして半世紀の歴史を綴りました。球団史そしてその時代の社会や世相も紹介しています。ぜひお読みいただきたいのは、

テレビ報道の世界に進んでからの取材経験談の「落合博満選手との1年」の章です。スポーツ記者でない

落合家庭番記者としての日々を、初披露しました。現在は球団GMである三冠男・

落合さんの素顔は?

顔は?



ゆいぽおと 1296円

### ■イスラム化するヨーロッパ

三井 美奈

(読売新聞社国際部)

イスラムとの共存に悩む欧州 多発するテロ、押し寄せる難民、ポピュリスト政党の台頭――今の欧州はイス

ラム抜きには語れない。昨年1月まで約4年間、特派員としてパリに駐在し、そう実感した。過激派に加わる

若者やテロ対策専門家を取材した経験を1冊にまとめた。見えてきたのは、イスラム移民の同化に失敗し、

苦悩する欧州の姿だ。とりわけ、2度テロの標的となったフランスの間

は深い。日本

にとっても、決して他人事ではない。



新潮新書 778円

### ■キューバ

#### 超大国を屈服させたラテンの魂

伊藤 千尋

(朝日新聞出身)

米国との国交回復の背景にあるもの

学生時代の1970年代にサトウキビ刈り労働で半年間住んで以来、80

年代から特派員や雑誌の取材などで計40年以上にわたり、キューバを体

当たり取材した。ソ連を解体に追い込んだ米国がなぜ身近な小国をつぶ

せず、逆に自らの政策を転換することになったのか。超大国の圧力に踊

って抵抗し、ついに自立を貫いた陽気なキューバ気質「社会主義」から

「社会正義」に衣替えるカストロ後の社会を描く。



高文研 1620円

### ■危機と決断 前FRB議長ベン・バーナンキ回顧録(上下) (ペン・バーナンキ著、小此木潔訳)

小此木 潔

(朝日新聞出身)

「マニア」が語る恐慌論 リーマン・ショックに始まる2008年の世界

金融危機は、実は史上最悪の「金融恐慌」であった。経済に詳しい人たちの反応は、「やはり」と「まさか」に二

分されるだろう。自らを「大恐慌マニア」と呼ぶバーナンキ氏は、危機を

大げさに恐慌だと騒ぎ立てるような手法とは無縁の人であり、そうであるがゆえに、あの危機を金融恐慌と呼んだ根拠を明快に示している。

本書こそグローバル化時代の恐慌論であり、危機克服の経済学でもある。

二つのコリア 第三版

国際政治の中の朝鮮半島(ドン・オ

ーバード・ファー、ロバート・カーリン著、菱木一美訳)

金正恩時代に至る迫真の現代史 毎日新聞社の「アジア・太平洋賞大賞」を受賞した訳書「二つのコリア」の抜本的な増補改訂版である。北朝鮮問題に精通する元米外交官、ロバート・カーリンを共著者に加えた新版は、米朝核交渉や小泉訪朝の舞台裏をはじめ金正恩登場に至るまでの数々の衝撃的な新事実を明らかにしている。ドン・オバード・ファーが執筆した旧版部分も最新の学術研究を基に500箇所以上の大改訂が行われ、朝鮮半島問題の理解に必須の新著となった。



角川書店 各2052円



共同通信社 3996円

室内を歩く。ひたすら歩く。廊下を曲がり、畳の部屋の奥に到達すると踵を返し、また廊下へ。無表情に同じ足取りで黙々と自宅を歩き続ける。獄中からの習慣らしく、これが袴田巖さん(79)の「日常」である。

1966年に静岡県で起きた一家4人殺害事件。袴田さんは、裁判で一貫して無実を訴えたが、80年最高裁で死刑が確定。再審を求め続け、



試写室  
(1・12)

## 袴田巖 夢の間の世の中

### 今の自由も「ウソ」なのか

伝わってくる。時に自分を「最高裁長官」や「王」と名乗ることもある。弟の無実を信じ続け、今は共に暮らす姉の袴田秀子さんとの日常は平凡だが、貴重な自由空間だ。ひたすら歩き旺盛な食欲、そして寝る。

家族や支援者の想いが少しずつ通じたのか。死への恐怖が薄らいだせいか、次第に表情は柔らかく変わっていく。自宅に遊びに来た親戚の子どもに目を細め、最近では一人で好物の菓子パンを買うまでになった。

しかし、まだ立場は「死刑囚」のまま。検察側が即時抗告、今も再審を始めるかどうかの審理が続く。

試写会であいさつに立った金聖雄監督によると、袴田さんは完成した映画をなかなか観てくれず、ようやく観た感想は「こんなのはウソだ」。

袴田さんにとっては、48年ぶりの自由な生活も、いまだ「ウソ」の世界らしい。銀幕に映る獄中書簡の哲学的な言い回し、袴田さんの言動にさまざまな想いがよぎるが、しよせん、それも袴田さんの宇宙観の前では「ウソだ」と論破されている気がする。

日経編集制作センター社長 王鷲 幹雄  
製作・配給 KINOCITY  
2月27日からポレポレ東中野ほか全国で順次上映

背筋がひやりとした。巨大企業の妨害やメディア操作に一人のスウェーデン人映画監督が抵抗している。同じことが日本で起きたとき、新聞やテレビで働く私たちはスクラムを組んで闘うことができるのか。他国の出来事では済まされない。

主人公は、フレドリック・ゲルテ監督(59・写真下)その人だ。中米



試写室  
(1.28)

## バナナの逆襲

### 多国籍企業との攻防 ジャーナリスト魂で映画に

ニカラグアのアバナ農園の労働者が有害農薬の使用中止を求め、米国の多国籍企業を相手に訴訟を起こした。その裁判の過程を追ひ、農薬被害の事実を明らかにしようとして製作したドキュメンタリー映画が、企業のおひざ元であるカリフォルニア州のロサンゼルス映画祭のノミネート作に選ばれたことから、上映を阻止し



ようとする企業側の容赦ない攻撃と米マスメディアへの説得工作が始まる。

窮地に立つ監督を救ったのは市民のメール。同社が扱うバナナをサラダに使っていたスウェーデンのハンバーガーショップの姿勢を聞いただし、同店は他のバナナに切り替えた。さらに世論が「報道の自由は守られるべきだ」と後押しした。

公開前に初来日し、試写の会場に現れたゲルテ監督は「日本の記者たちから質問を受けているが、報道や言論の自由はジャーナリストの権利であり、民主主義には欠かせない」と強調。そして「権力の弾圧を受けた仲間のために何ができるかを考えてほしい」とも。

元はテレビや出版業界などで働いていたゲルテ監督は「ニカラグアの実態が米国で暴かれるのを恐れた企業が私に攻撃の矛先を向けた」と分析する。自身に降りかかった出来事を最初から記録し、映画にしてみよう。そのジャーナリスト魂、不屈の精神に目を見張る。

毎日新聞社会部 明珍 美紀

©KINOCITY  
2月27日から東京・渋谷のユーロスペースで公開。裁判のドキュメンタリー(原題「Bananas」)を含めて上映

2015年(第43回) 予想アンケート結果 (2015年1月15日実施 応募総数 334) 平均6.6点

|                                                | 正解       | 正解率   |
|------------------------------------------------|----------|-------|
| ①12月31日現在のわが国の首相は誰か                            | (安倍晋三)   | 91.9% |
| ②年内にプーチン露大統領が訪日                                | (しない)    | 39.7% |
| ③年内に瞬間風速で1ドル=140円を超える円安になることが                  | (ない)     | 68.7% |
| ④2015年東証大納会の日経平均株価終値は、2014年大納会の終値(1万7450円77銭)を | (超える)    | 61.8% |
| ⑤原油価格引き上げのため、OPECが減産を                          | (決めない)   | 47.2% |
| ⑥アフリカ大陸でのエボラ出血熱流行の終息をWHOが宣言                    | (しない)    | 64.8% |
| ⑦日本人がノーベル賞を受賞(ジャンルを問わず)                        | (する)     | 57.3% |
| ⑧戦後70年の今年、オバマ米大統領が広島か長崎を訪問                     | (しない)    | 69.0% |
| ⑨テニスの錦織圭選手が4大会(全豪、全仏、ウィンブドン、全米)のいずれかで優勝        | (しない)    | 57.3% |
| ⑩野球・ソフトボールが東京五輪で正式種目に復帰することをIOCが決定             | (する・しない) | 100%  |

※東京五輪種目の正式決定は15年内が確実視されていたが、IOCの方針が変わり16年に延期された。「野球・ソフト」採用は事実上内定とされているが正式には未定。アンケート担当の企画委員会は審議の上、「する」「しない」いずれも正解とすることに決めた。

200人が新年を祝う 満点4人を表彰

年初恒例の新年互礼会員懇親会が1月14日(木)午後6時から10階ホールで行われ、207人が参加した。

伊藤芳明理事長のあいさつと乾杯、来賓紹介に続き、「2015年予想アンケート」の表彰が行われた。今回は4人が満点を獲得。西澤豊氏(時事通信社代表取締役社長)、國府一郎氏(日本新聞協会事務局長)、池田吉紀氏(日本経済新聞出身、日本経済研究センター特任研究員)、篠丸頼之氏(日本テレビ出身)が登壇した。代表として、昨年に続いて最高得点の西澤氏が喜びを語った。

政界からは福田康夫元首相、岡田克也民主党代表、山口那津男公明党代表らが出席。福田氏は「クラブ会報を毎号楽しみにしている。さまざまなゲストのリポートが短くまとめられており、非常に便利な情報源」と愛読者ぶりをア



全問正解の(左から)篠丸、池田、國府、西澤の各氏

ピール。岡田氏は「アンケートに12月31日時点での総理大臣を聞く設問があるが、一人くらい『岡田克也』と書いてくれる人があってもいいのではないか」と話し、会場の笑いを誘った。

昨年クラブで会見を行ったゲストも出席した。テレビ演出家の今野勉氏、俳優の宝田明氏らは会員に囲まれ、談笑する

● V2喜びの弁

正月休みに筒井康隆さんの『モナドの領域』を読んだ。何でもお見通しの「GOD」が登場人物に乗り移り、哲学を語る。奇天烈な筒井ワールドだが、日本記者クラブの2015年予想アンケートで2年続けて全問正解との知らせには、



想アンケート

神が降りてきた!?

私の頭にもGODが降臨したのかと、奇妙な気分になった。ただ、1度目は「どうせまたまただろう」と思っていた社員に、2年連続が「社長、ひよっとして」と思わせるきっかけになれば痛快である。3年連続は衆参ダブル選挙あたりが難関。私のGODは既に答えを出しているが、さて…。

時事通信社社長 西澤 豊

姿が見られた。ドイツ、スペイン、イスラエルの各国大使らも参加。会員懇親会では初めて導入した会場音声の同時通訳サービスや、英語版の予想アンケートは外国人ゲストにも好評だった。(村田 茜)



## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

### ■サイマル・グループ新年懇親会

日本で初めて発足した国際会議の通訳者グループであるサイマル・インターナショナルをはじめとするサイマル・グループの新年会。通訳者・翻訳者らが出席した。(1.7 10階ホール)

### ■新聞通信調査会 月例講演会

月刊誌「メディア展望」の読者を対象に開催している。「人口減少問題への地方の取り組み」の題で、共同通信社企画委員兼論説委員の伊藤祐三氏が講演した。(1.13 会見場)

### ■第42回「都市問題」公開講座

主催：(公財)後藤・安田記念東京都市研究所「自治体と観光」をテーマに開催した。西村幸夫・東京大学先端科学技術研究センター所長による基調講演の後、パネルディスカッションが行われた。今井健太郎・大田区政策課長、山出保・石川県中小企業団体中央会会長(前金沢市長)らが登壇した。(1.16 10階ホール)

### ■日本外交協会 新年例会

外務省の齋木昭隆事務次官が『変貌する国際情勢と日本の外交』の題で講演した後、パーティーが開かれた。(1.18 会見場)

### ■民放解説研究会 賀詞交歓会

民放各社の解説委員、キャスター、政治部記者らが集まり懇談した。ニュースソース側から、菅義偉官房長官、甘利明経済再生担当相(当時)、加藤勝信一億総活躍担当相、山口那津男公明党代表、岡田克也民主党代表などが出席した。参加者は約110人。(1.19 会見場)

### ■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる勉強会。佐藤勉・自民党国対委員長をゲストに招いた。(1.20 大会議室)

### ■第1回サステナブルファイナンス大賞授賞式

主催：(一社)環境金融研究機構  
日本の金融機関の商品や事業で環境に配慮した事例を顕彰する賞が創設された。第1回大賞には日本政策投資銀行の『DBJサステナビリティボンドの発行』が選ばれた。優秀賞3件、特別賞1件とともに表彰され、受賞機関による報告会および佐藤泉氏(第一東京弁護士会)による記念講演が行われた。同機構の代表理事はEnvironmental Financeという言葉で「環境金融」と訳して日本に紹介し、著書もある藤井良広会員。(1.22 会見場)

### ■長谷川洋三さんを想いだす会

昨年1月20日に死去した長谷川洋三さん(日本経済新聞出身・享年71)を想いだす会が開かれた。記者仲間ら約140人が集まり、故人をしのんだ。(1.26 アラスカ)

## 2015年度 会見詳録14本公開

2015年度に開催した記者会見・研究会のうち、14本の全文文字起こしを公開しています(1月末現在)。いずれもクラブのウェブサイト「会見詳録」で閲覧、印刷ができます。同ページでは過去の約720本の記録にもアクセスすることができます。

- 石田勇治・東大大学院教授「戦後処理がドイツの民主主義を強くした」(2015.4.17)
- 武井彩佳・学習院女子大准教授「両者が実をとり現実的な判断を繰り返し達成された」(4.22)
- 川喜田敦子・中央大教授「国際歴史対話は、対話から出てくる問題提起に国内がどう向きあっていくかが、問われる」(4.24)
- 佐藤健生・拓殖大教授「戦前とは異なる国家の証しを立て続ける」(5.13)
- 翁長雄志・沖縄県知事 記者会見 (5.20)
- 山崎拓・元自民党幹事長「自衛隊よ、汝警察犬となるなかれ」(5.21)
- 柳田邦男・ノンフィクション作家「被害者の精神史 70年の歩みと転機の今」(5.27)
- 篠田正浩・映画監督「私の戦後70年、ゾルゲの場合」(6.1)
- ベニグノ・アキノ・フィリピン大統領「西フィリピン海での軍備増強を受け、両国は海洋安全保障分野に積極的に関与すべきである(日本語・英語)」(6.5)
- 村山富市・元首相、河野洋平・元官房長官「なぜ、どういう気持ちで、我々は2つの談話を出したのか?」(6.9)
- 鳥原光憲・日本障がい者スポーツ協会会長、日本パラリンピック委員会会長「全競技場で観客を満員に 2020パラリンピックの意義と課題」(8.5)
- マーク・トンプソン・ニューヨーク・タイムズ社長兼最高経営責任者「デジタルとモバイルの世界への移行(日本語・英語)」(9.25)
- 福井健策・弁護士「五輪エンブレム問題と著作権」(9.28)
- 柴田優呼・オタゴ大助教授「原爆が作った日米関係」(10.29)

### 〈今後の公開予定〉

- 加藤典洋・文芸評論家「『戦後入門』をめぐって一戦後70年目の戦後論」(12.9)
- 中島岳志・北海道大准教授「戦後70年 保守は大東亜戦争を肯定できるのか」(12.15)
- キャロライン・ケネディ・駐日アメリカ大使 記者会見 (12.17)
- 早川英男・富士通総研エグゼクティブ・フェロー「2016年経済見通し 日本経済全体の先行き、金融政策の在り方」(2016.1.13)
- 山口義行・立教大経済学部教授「2016年経済見通し 中小企業の動向、“草の根”の視点からみた日本経済」(1.22)

## レストラン\*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 如月懷石(3/4まで)

先付：穴子小袖寿司、網笠柚子ほか お椀：清汁仕立て 造り：三点盛り 焼物：鰯利久焼 煮物：里芋、栗麩オランダ煮 揚げ物：子持昆布筍挟み揚げ 食事：蟹雑炊 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 牛フィレ肉のソテーコース(2/29まで)

白子のボワレ 柚子風味ヴァンプランソース、蟹肉とほうれん草のスープ、牛フィレ肉のソテー 牡蠣入りフォンデュソース、シェフ特製杏仁豆腐、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、デイナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

## 国産牛ロース肉のすき焼き鍋をどうぞ

昨年好評だった、すき焼き鍋を今年も提供します。2月26日(金)まで、夜の9階レストランでお楽しみいただけます。お一人2,800円で、お二人からお受けします。ご利用の際は予約(3503-2723)をお願いします。

## アラスカ・野添料理長が退職



「お疲れさまでした」。和食レストランのスタッフらに囲まれる野添さん(前列中央)

37年間にわたり、アラスカ和食部門の料理長を務めた野添文夫さん(66)が2月10日退職されました。

12年間の修行を経てアラスカに入社したのが1979年。以来、フレンチの老舗アラスカで、日本料理部門の確立に貢献されました。ランチメニューや夜の懷石コースを会員の舌と予算に合うように工夫して好評でした。

「3月から古里の長崎で、兄の仕事を手伝います」。これからは米作りやアスパラ、トマト、イチゴ栽培など旬の食材づくりに、板前の経験を生かして挑戦するそうです。野添さんの再出発に事務局一同、大きなエールを送ります。

(事務局 長谷川和子)

## HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

### 私の取材余話 ベテラン会員によるエッセー

#### ●「情報戦うら・おもて(パート4)」

進化するスパイ技術 どこまで行く米国の情報戦略

村上吉男会員(朝日新聞出身)

## クラブ賞候補に8人、特別賞候補に7件が推薦

2016年度の日本記者クラブ賞と同特別賞の会員からの候補推薦は1月末で締め切りました。「クラブ会員または法人会員社に属する個人」が対象のクラブ賞には8人が、「原則として会員以外のジャーナリストやジャーナリズム活動」が対象の特別賞には7件が推薦されました。

今後は、推薦委員会(個人D会員8人で構成)がまず審査し、ふさわしい候補を選考委員会(総務委員15人で構成)に具申します。内規により、推薦委員は、特別賞について会員からの推薦以外でも適格と思われる候補を独自に推薦できます。4月に選考委員会を開き、受賞者を理事会に答申、理事会が決定し発表します。贈賞式は5月25日、社員総会の日に行います。

## 春の異動 会員登録変更のお届けを

### —— 役職変更もご連絡ください ——

会員の入会、退会には所定の「変更届」があります。変更は会員資格委員会に諮られます。変更のある場合は事務局の青山(電話03-3503-2727 e-mail aoyama@jnpc.or.jp)へご連絡ください。役職変更だけの場合もお知らせ願います。

## 受付で署名をお願いします

クラブへお越しの際は必ず受付で署名をお願いします。待ち合わせで後からおいでになる方や、伝言などの連絡にも必要ですので、ご協力ください。

<訃報> 安東謙会員(毎日新聞出身、80歳)が昨年12月24日、死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 2月の行事予定(2/3現在)

|     |                                                                   |
|-----|-------------------------------------------------------------------|
| 15㊟ | 14:00～15:30 10階ホール<br>記者会見 杉本和行・公正取引委員会委員長                        |
| 17㊟ | 15:30～16:30 10階ホール<br>シリーズ企画「3.11から5年」⑦<br>品川萬里・福島県郡山市長           |
| 19㊟ | 16:00～17:00 10階ホール<br>シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」①<br>志賀俊之・産業革新機構会長兼CEO |
| 22㊟ | 13:30～15:00 10階ホール<br>シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」②<br>山海嘉之・サイバーダイナミクス社長 |
| 24㊟ | 14:00～15:00<br>シリーズ企画「国連と日本人」③<br>北岡伸一・JICA理事                     |
| 26㊟ | 15:00～16:00 10階ホール<br>記者会見 照井翠・俳人                                 |

## クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ..... ☎3503-2723
- 洋食レストラン(10階) ..... ☎3503-2766
- 貸室予約・宴会打ち合わせ ..... ☎3503-2724
- 受付 ..... ☎3503-2721
- 会員事務 ..... ☎3503-2727
- 経 理 ..... ☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み ..... ☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス ..... kaiken@jnpc.or.jp

## 会員現況

- 法人会員：134社 ●基本会員：743人 ●個人会員：1,347人
  - 法人・個人賛助会員：64社・141人 ●特別賛助会員：99人
  - 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：158人
- 計：198社・2,500人

## 会報委員会

- 委員長＝飯塚 浩彦
- 委員＝稲沢 裕子 大寺 廣幸 鈴木 仁
- 高橋 茂 長崎 和夫 藤井 良広
- 藤澤 秀敏 向山 明生 吉澤 正一
- 渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：梅津 <sup>うめ づ</sup> 忠之 <sup>ただ ゆき</sup> (東京新聞写真部)



「チェルノブイリ事故から30年」企画取材で訪れたウクライナ・ジトーミル州ナロジチで。事故後、強制移住区域に指定された地に、今も1万人が放射能におびえながら暮らしている＝2015年11月22日

## 30年後の放射能

アフロメーエフ元帥は1991年のクーデターに失敗し自殺したソ連軍人だが、チェルノブイリ原発事故後の軍の活躍について講演した時、どこか悲愴な表情で「赤軍最後の栄光」と予言めいたことを言ったのが忘れられない。無数の兵士を次々と原子炉近くに送り込み、ついにドニエプル川の汚染を食い止めた手柄話。いったい何千人の兵士が死んだのだろう。しかし兵士の犠牲がなければ、住民の犠牲はもっと大きかったに違いない。「万一、人権と自由の国で原発事故が起これたら」と胸騒ぎがした。

事故から30年。チェルノブイリから70キロ離れたナロジチ村でミルク1リットル当たり219ベクレルの放射能が検出された。牛は土地の草を食べ、糞をし、またそこに草が生え…こうしてセシウム137が30年間循環したのである。写真の少女の目が頼りなげなのは、きつとどこか痛いのだ。ほとんどの子が頭痛か足の痛みを訴えるという。かつてアメリカからの輸入果物の汚染と闘った小若順一さんは今、ナロジチ村の牛によその穀物を食べさせる活動をしている。

モスクワからキエフに行くと、空も人も建物も教会の典礼まで明るい。ソ連崩壊前、ウクライナ独立を目指す愛国者たちは「ロシア人の額には奴隷の刻印が押されている。ウクライナ人は自由の民だ」と胸を張った。今ウクライナは新たな独立の戦いの最中で、チェルノブイリの汚染対策にまで金が回らない。日本のNGOの努力で一日も早く、村のミルクの放射能が許容上限の40ベクレル以下になり、少女たちが痛みから解放され、青い瞳に輝きが戻りますように。

(松浦 茂長)